

## 史料紹介 村山家文書の?橋泥舟関係書簡について (上)

著者	岩下 哲典
著者別名	IWASHITA TETSUNORI
雑誌名	東洋大学文学部紀要. 史学科篇
巻	43
ページ	77-122
発行年	2017
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00009904/">http://id.nii.ac.jp/1060/00009904/</a>

# 史料紹介 村山家文書の高橋泥舟関係書簡について（上）

岩下 哲典

## 解題

村山家文書とは、静岡市在住の村山晴彦氏が所蔵する古文書で、おもに幕末の旗本にして、明治初期には静岡藩士、田中奉行・田中勤番組頭であった高橋泥舟の書状を中心とした史料群である。岩下らが、村山家文書を知ったのは、静岡・山岡鉄舟会の手塚喜和子氏の紹介で藤枝市在住の小池吉弘氏と知り合い、小池氏に仲介していただいたことがきっかけである。村山氏のご許可を得て、2013年7月、親しく調査することができた。調査にあたったのは、岩下、藤田英昭、徳江靖子であった。調査では写真撮影を行い、その後、文書写真を会読した。会読は、岩下、徳江、イアン・アーシー、服部英昭、本林義範、毛塚万里、王媛が行い、「釈文」を作成した。また、「目録」は徳江・毛塚が担当した。そのうえで、解題および大意・コメントを岩下が作成した。

村山家文書の内容は、明治10年代から同36年の泥舟死去までの、泥舟の書状56通が中心で、それ以外のものは、長男道太郎の書状が2通、山岡鉄舟書状2通、鉄舟画1枚、鉄舟妻山岡ふさ書状1通、泥舟4男村山徧通（ゆきみち）書状1通、同人関係文書1通で、都合64点である。今回の泥舟書状には、晴彦氏の父晴美氏が作成された釈文のみの

もの、つまり原本は不明なものが2通含まれている。

泥舟書状は、村山智妙・みきへの手紙がほとんどで、村山家に養子として入った4男徧通の消息や、泥舟自身や家族、山岡鉄舟・大久保家などの親戚の様子、また村山家の近所等との交流などが書かれ、明治期旧幕臣の生活の一端がよくわかる書状である。それによれば明治期の泥舟は、病気に悩まされ、また多くの人から揮毫を頼まれ、比較的忙しく生活していたことが理解される。

全体を通観して、よくぞ残してくださったと歴代村山家の方々にまずもって感謝申し上げたい。特に晴美氏の、先祖泥舟への熱い思いは、氏が作成された釈文や、現在、藤枝市田中城下屋敷御亭になっている、旧村山家家屋の寄贈にあらわれている。泥舟が、田中奉行・田中勤番組頭として勤務した田中城の御亭は、村山家に払い下げられ、住居として利用された。その後、藤枝市に寄贈され、保存されているものである。本当によくぞ寄贈してくださったものと思う。伝えられた文書も藤枝にとり、そして日本史上も貴重な史料で、泥舟家族の歴史が、こうして残ることになったのは大きな喜びである。文書ひとつひとつから泥舟や家族の息遣いまで聞こえてくるように思う。以下に大意とコメントを掲載する。「下」では、釈文を掲載する予定である。

#### 参考文献

- 岩下哲典編著『高邁なる幕臣 高橋泥舟』教育評論社、2012年
- 岩下哲典・藤田英昭・徳江靖子・大場勇人・大場雅子「幕末三舟の一人、高橋泥舟研究覚書(4)——泥舟4男村山徧通家の文書と村山家の由緒について」『Journal of Hospitality and Tourism』Vol.10 No.1 2014年
- 岩下哲典『病とむきあう江戸時代』岩田書院、2017年

## 泥舟書簡の大意とコメント

文書 1 明治13年5月14日付村山智妙・みき宛泥舟書状

〔大意〕 田中に出かけいろいろお世話になりました。物入りもあつたことは申し訳ないことです。帰りの道中でもあちこちと引き留められ、「夜逃げ」同様に帰京しました。山岡鉄舟も5月10日朝に出立したので、10日夕に帰宅したため逢うことができなかつたのは残念でした。どうせ面会できないなら、こんなな急いで帰ることもなかつたのですが、大急ぎで帰りました。貫一（徧通）も健康で道中もいろいろ珍しいことを見聞きし、東京でも兄（道太郎）とともに日々見物しています。今日も中西へ次郎さんを連れて行きました。山岡へは一昨日、私が同道して行きました。貫一から手紙を差し出すはずですが、何やら心が弾んで書けないようですから、私からご安心なさるよう申し上げることに致しました。妻お秀から手紙を差し上げるべきところですが、来客が多く取り込んでいますので、まずは、私からよろしく申し上げますことといたしました。妻も、いつの間にか狸のようになっておりました。九月に出産予定とのことで肝をつぶしました。私がこしらえた覚えがないので、目下詮議中です。お笑ってください。この度は大変お世話になりました。幾重にも御礼申し上げます。帰京してから来客があり、揮毫依頼も多く困っています。詳しく東京の様子もお知らせしたいのですが、この手紙を書いている最中にも来客中で、話しながら描いているような次第ですので、いずれ後から詳しく申し上げます存じます。

〔コメント〕 泥舟が田中で村山家にお世話になったことへの礼状。貫一の様子も伝える。妻の妊娠を「たぬき」になつ

たと描写し、自分は覚えがないと笑いを誘っているところが泥舟の人間味が出ていて興味深い。

文書2 明治13年9月29日付村山智妙宛泥舟葉書

〔大意〕 来る10月2日に牛込区牛込来町八番地に移転するのでお知らせします。三上・伊藤・寛・高橋勝蔵・杉浦様に特には知らせないので、お手数ですがお知らせくださいますようお願い申し上げます。

〔コメント〕 明治13年10月に牛込来町に転居する通知。

文書3 明治14年1月13日付村山智妙宛泥舟書状

〔大意〕 こちらも一同無事、妊婦2人も健康。申請した出産届に不備があり、戸長から戻されたとのことで御手数をかけました。こちらでは主旨がわかれば、紙や様式が違っていてもいいのですが、田舎は「やかましき」役人が、御主旨をわからなかったのか、いつもいつも手数料がかかるのは困りのものです。今回の御届は下書きの通り、私が一生懸命書きましたので、戸長にそのことをお伝えください。お静のことですが、「神藤方へそうせきの願」を差し出すことは、当地の慣例で間に合わないとは思いますが、ついでの時に問い合わせていただけますようお願いいたします。

なお、貫一は健康ですので安心してください。

〔コメント〕 泥舟が書いた出産届が、戸長に差し戻されてしまい、少し愚痴をこぼしているのが面白い。再度下書きを書いたが、戸長によく説明してほしいといささかうんざりしたていである。「そうせきの願」は、送籍の願いだと思わ

れる。

文書4 明治14年5月5日 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 今回、山岡鉄舟が尾州表に御用に行くとのことと、愚妹（泥舟妹ふさ、鉄舟妻、英とも書く）も同行し、そこらを通りますので、きつとお会いすると思います。こちらの様子を詳しくふさに話しておきますから、同人からよろず申し上げますので、どうかお聞きください。貫一も健康で、用達しをしています。

北海道産の鮭の寒漬けが、少しですが手に入りましたので差し上げます。三倍酢でお召し上がりになりますとおいしくいただけます。何か差し上げたく思います、（ふさが）嵩張る荷物になる物は持って行かないとのことと、わずかなものですが、お笑いください。隣家や伊藤さんよろしくお伝えください。

〔コメント〕 山岡鉄舟夫婦が名古屋に赴く際、ふさ（英）が田中で村山家と交流をもったことが理解される。

文書5 明治15年9月2日 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 御兩人様ご健康の事、先日大久保老人から聞きました。喜ばしいことです。そちらではコレラが流行しているとのこと、こちらは鎮まりましたが、そちらは如何でしょうか。いずれも食べ物から発症しますので、食べ物にはお気を付けてください。偏通もいたって健康でいますから、安心してください。先日、妻が脚気で衰弱し、とても困りました。その上、子供も発熱し、やかましく4、5日難儀しました。昨今は妻も快方に向かい、子供も全快して、ようやく手す

きになりました。私は老人になればなるほどに健康になっています。ただ疝氣と痔に悩まされていますが、これは美人の崇りとあきらめています。

先日山岡にご依頼されたため物、御書付を仕舞無くしてしまったので、今一通お認めくださいと徧通に依頼された件ですが、同人から山岡にお話したようですし、私からもお願いしておきました。山岡家も病人が居り、取り込んでいて、延び延びになっていますが、もはや快方に向かっているようですから、近いうちに出来て送って来るのではないかと思います。

〔コメント〕コレラの流行と罹患、回復のことなど知らせている。村山家からの鉄舟の揮毫依頼に関して、状況を知らせている。明治15年夏、藤枝でコレラが流行した模様である。

文書6 明治17年9月21日 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 9月15日の大風雨、東京も倒壊した家屋が多かったが、志太・益津両郡で倒壊家屋が1017軒もあったと聞いています。今日、長次郎から聞いて驚いています。御家は二階建ですから、特に風が強くあたり、御婦人だけですから、困ったことがあります。私の方でも道太郎、誠四、謙三郎が泊番をし、徧通は神藤に泊番に行きました。それで男は私一人なので、かつ病後の身なので防ぎようがなく、四方の塀が残らず吹き倒され、瓦も落ち、実に困りました。そちらでは変わったことがなかったとお聞きしましたが、當方は、あとかたづけに忙しくしており、御尋ねもしなかったのですが、長次郎からの手紙で驚き、とりあえず様子を窺おうとしたものです。序で構いませんのでお知らせくださいますように。貫一もとても心配しています。遠くですのでいろいろできず心配しています。

妻からもよろしくとのことでした。

〔コメント〕 明治17年9月の台風の被害を案じて出したもの。村山邸は田中城御亭を移築した住居なので、2階建のため心配している様子がよくわかる。なお御亭は、村山家に二三〇両で払い下げられ、泥舟が八〇両を支払っていることが記録上からわかっている。

文書7 明治19年4月28日 泥舟書状

〔大意〕 先年より斡旋人や門人と相談して取り決めましたように、他に譲られるならば、それをおやめになってはどうかと思います。近頃は賢い人が多く、こう決めても、時々馬鹿にされることがあり、他の大家も刷り物でさえ謝礼金を取り決めたものがあるようです。それも私より余計に謝礼金を取るそうです。

〔コメント〕 揮毫の謝礼金を決めたもの。泥舟は他に比べると格安であったようである。

文書8 明治20年1月26日 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔文意〕 昨年中は病気で引籠っていましたが、御尋ねいただきありがたく存じました。おっしゃる通り、ご近所どころか遠方の美人まで（智妙・みきの事か）心配していただき、神仏に祈っていただいた故か、全快致しました。新年になって特別若くなったとの評判ですが、これは昨年そのままひげを剃らなかつたのでさらに良い男に見えたのでしょう。定めてあなた様にもよい男とお噂してください。一人でにやにやしています。年末年始の歌がでまし



たので、御笑い種に認めました。(和歌省略)

新年のご挨拶が、来客が多くて遅れましたことお許しください。

なお、時節柄ご養生ください。私も疝氣持になり、新年になって二度も引籠っています。これは少し使い過ぎたかとも思っています。

〔コメント〕 泥舟の茶目っ気たつぷりの書状である。

文書9 明治20年4月8日 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 先日、塩沢久平が東京に出て来て、そちらの様子を親しく聞きまして安心いたしました。その時、同人へ詳しく伝言を頼みましたので、きつとお聞きになっていらつしやると思いますが、徧通が2月末から体調を崩し、疝氣も疑われ、次第に症状が悪化しました。幸い当時名医と評判の千葉(修造)という者、これは私の門人同様の者で、とても親切な人ですが、この人に診察してもらったところ、かなり重い症状であるということ、それから十分な治療を受け、一時は、心配な状態になりましたが、先月半ばから少しずつ快方に向かいました。しかしながらまだ床に居り、私の居間までゆっくりとしか来れないような状態で、未だ薬用手当の状況です。久平には、心配なきように伝言を依頼しましたが、この人もぼんやりして忘れることもあろうかと思ひ、(ご兩人様の)ご近況をお伺い旁、この辺りの状況を申し上げます。発病してすぐにすこし申し上げようと思ひましたが、遠地お住まいのこと故ご心配をかけてはと思ひ、あえて申し上げませんでした。ご心配なきように。先ごろ徧通が病氣になつてすぐに、誠治が富山でリュウマチと脚氣で悩み、独り者で難儀したため、やむを得ず東京に戻つたものの寝起きもままならず、実に困りました。本人は脚氣の症

状の方が重かったのか、この頃は充分快方に向かい、少しは働くこともしております。その間に私も時々持病で伏して困りました。この頃は家の内外の事で私一人では手が回らない状況です。ともかく時候の挨拶かたがた申し上げました。くれぐれもご安心ください。

なおなお、妻からも宜しくとのこと。妻からも手紙を差し上げたのですが、子供が病気のため手が空かないので、お許しください。

〔コメント〕 千葉修造は、泥舟・鉄舟の知人で医師。谷中全生庵に墓所がある。

文書 10 明治20年6月22日 村山智妙宛泥舟葉書

〔大意〕 徧通不快も日増しに快方に向かっているので、ご安心ください。医師も「誠ニいりまめにはな」と言っている。

文書 11 明治23年8月13日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔文意〕 先日は私の不快をお聞きになりお手紙を頂戴し、ありがとうございます。先般御帰りの後、気分が悪くなりましたが、ご承知の通り法事もあり、とりわけ怖気づいております故、23日からほとんど平臥し、持病と違つて、神経が昂ぶり、疲労し、今回は冥土に旅立つかもしれないと思うほどで、皆々大いに心配しておりました。この頃ようやくよくなりましたが、50日も寝ておりましたので歩行も不自由で、養生いたしておりました。もはや56日も過ぎたのでそろそろ四谷あたりに行こうかと思つていきますので安心してください。徧通もよく世話してくれるので喜んでいきます。

そちらの大久保家では鉄造がそちらにいては気遣いもあり、老婆の里とも相談して、近日引き取りたいと思います。私は病氣故、特にお構い出来ませんが、こちらで難しいことが生じるか心配ですが、これまでいろいろお世話下さり大変ありがたく、お礼のことばも御座いませぬ。あなた様に都合よく引きまとめになるように楽しみにしています。

なおなお、妻からも手紙を差し上げるべきですが、私の病氣で取り込み、手紙を差し上げられず申し訳なく思います。御ついで折に、小野田長次郎へも私の容体をお話しく下さい。

〔コメント〕 大久保は泥舟の親戚の元旗本。

文書 12 明治 31 年 12 月 28 日 村山みき宛泥舟書状

〔大意〕 これから帰京したことを手紙に書こうと思っていましたら、昨夜ミカンが届き、またお手紙も届きました。私は、昨年重い病氣になりましたから、とても回復は難しいと医師にも言われましたが、幸にだんだん回復し、転地療養を医師にも勧められました。弟子の内に中国筋に行く者がいましたので同道することとし、すぐに5月初めには出発し、あちらこちら遊び廻り、行く先々で引き留められ、ようやく最近帰京しました。いまだ病氣も全快しておりませんが、このところの寒さにあたらぬように医師も心配していますので、帰って早々温まって養生しています。母上様も先日来、お体がしびれてご不自由とのこと、さぞかしお困りと思います。しかしこの度はしびれも軽く自由になられたとのことどうれしく思います。

偏通がお便りを出さないとの由、私の方も留守中に一度道太郎が来たようです。このごろはときの方へも手紙をよこさないとのことですが、特別に変わったことはないと思います。おそらく巡回しているのだらうと思います。

ミカン2箱お送りくださりありがたく、子供にも半分送りました。きっと喜ぶだろうと思います。本当にわずかですが、お母様に菓子など差し上げたく、お見舞のしるしとして金一円小為替にて差上げました。なんでもお求めいただきたく思います。

なおなお、お母さまにくれぐれもよろしく、家内よりもよろしくとのことです。

文書13 明治32年12月3日 村山みき宛泥舟書状

〔大意〕先月(11月)4日徧春殿が、ふと御出になりました。いろいろご事情もあり、にわかにご帰国することになったため、お土産もないので、私の揮毫をお望みになりました。そこで、有り合わせの分を数枚、少しお菓子代として金子を進呈いたしました。その時、お話の通りであれば、翌日はご出発になると思いました。ところがその後、無事に御着きになったかどうか何のお申し越しもなかったものですから、ただいままで今日か明日かとお待ち申し上げ、かつ心配いたしておりました。さらにお手紙もなく、さてはご帰国ではなく、あるいは「御寄留所」の御申しつけもあるかもしれないと疑い、また汽車中かもしれないと心配しておりますのでお問合せすべきか否や、お申し越しくださいますように。

御老人様、この頃如何でしょうか。どうかご養生専一に。私も病気が回復せず、びくびくしております。ともかく前段伺いたく存じます。

〔コメント〕御老人様は智妙のことと思われる。

〔大意〕台湾の偏通から去る4日に道太郎に郵便が届きました。披見したところ、先日江戸留守宅の時(偏通の妻「とき」)より、この先の見込みもないといういろいろ苦情を並べ、離縁してくれと申ししてきたとのことで、偏通も、子供が不愍であるとは思いつながら、男子として妻から離縁を言い出され、これまでろくろく送金もしなかったことから困ったあげくの離縁の申入れとは申せ、離縁を留まるようにというわけにもいかず、断然離縁するというを言っていました。ついでには子供2人のことは、迷惑で頼みがたいことだけれど、暫くは預かってほしいと強く言って来ました。私にはこれまでさまざまに迷惑をかけて来たので、直接私に言う訳にもいかず、道太郎からよくよく言ってほしいと言ってよかったです。このことまで私の方に何とも一つとして話がなかったもので、ともかく留守宅にも話し合いさせ、親子共に引き取ると細かに申し論しました。いよいよそうであれば、台湾へは離縁を留まり、詫びるようにと親切を尽したが、何の挨拶もなく、11月6日朝、子供を召し連れ老婆が来て、母親(とき)は立ち去ったとのこと、そうであればどこまでも離縁の決心と見受けられました。子供は不愍だが、このような不実な親では、将来むつまじくはならないと思ひ、またほかに仔細もあるかもしれないと察せられるので、子供は直ちに引き受けることといたしました。偏通はこのうえは一層奮発して身を立ても早く帰国したいと言ってきました。当家も、倅道太郎は非職で、今もどこにも出仕せず、私ひとりの力で引き受けたため、大いに困難であることは言うまでもありません。このような事情やむを得ざることをゆえ、偏通から道太郎に依頼したとおり引き受けることとしましたのでご安心ください。すなわち偏通はなお一層励むようにしてもらいたく、しかしながら、おこは少々は聞き分けがあるけれど、真は夜な夜な泣き出し、随分困っています。おこは我妻を慕い、真はゆきを「かかさま」と呼んで、少しも離れようとせず、不愍に思います

が、行く末の為にはこれが最良の道と思います。私も難儀の上に難儀が重なり、なかなか悪いめぐりあわせと想っています。とりあえずこのことを申し上げます。離縁の手続きは追々運ぶことと思えます。

なおなお、徧通留守宅にこれまでも 少しずつ台湾から送金がありました。なお、私や親戚にも時々送金がありました。しかし子供二人もいればやはり困ることには相違なく、この暮れはとでも少しのお金ではおくれなれないと思ひ、親子共に 当人（徧通）が引き取るように取り計らいたいと思つていた矢先に前文のような始末となりました。これも時の流れだと思ひます。

これは、私にも隠していたようですが、徧通は先ごろ賊難に遭遇し、御預の金子を取られ、そのため疑いを受けてしばらく警察に留置されいろいろ尋問され、ようやく最近、疑惑が解け解放されたとのことです。実に思ひもよらない災難で、大いに難儀したとのことです。これらはあなたさまと私が高齢故、心配かけないように隠していたとのこと、これもついでに申し述べておきます。そのほかいろいろ申し上げたいこともありますが、病氣もあつて書けないので、あとでまた申し上げたいと思ひます。

〔コメント〕徧通が台湾で働いていたが、その妻ときが子供2人（おこう、真）を泥舟家に預けて離縁したいと言つてきた。徧通は、台湾で預り金を盗難にあつてとられてしまい、警察の事情聴取を受ける等したが、泥舟らが高齢なので心配させたくないと黙つていた。離縁の一件も道太郎への手紙で泥舟は知り、離縁にむけて動くことになつたとのこと、なかなかいろいろなことがあるもの。

文書15 明治32年12月15日 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 先日はお返事をいただきました。こまごまお書きいただき、一同にも聞かせました。子供も、お幸は泥舟妻、真はゆきが世話をし、(泥舟宅へ) 来た時から、お幸はははさま、真はかかさまと言つて少しも離れず、なんとも不愆です。真は夜中に目をさましますので、だれも安眠できない状態です。しかし日々だんだん慣れていくでしょうから、安心してください。とにかく徧通が帰ってくるまでは、何としても御預かり致しますので、そのことを御含みください。子供を私の方で同居させる届は近日牛込役所からそちらの郡役所に回りますのでそのことも申し上げます。子供ながらも少し感じていると見えて、ときのことには口に出しません。今回の件では、「ときの不義もの」が真に憎むべき者です。お送りくださいましたミカン2箱、昨夕確かに届きました。速やかに開いて子供に与えました。大喜びでした。私の病氣、なかなか全快せず、今も薬を使つており、難儀しています。もはや故郷への帰り支度かとも思います。くれぐれも子供のことは安心してください。

なおなお、来週にはおみき様がお出京して、ひとり連れ帰られるとのことですが、とても離すのは難しいと思います。徧通が帰ってきたうえで御出くだされたく、ついでに申し上げます。

〔コメント〕 ときは、徧通の妻の名前であり、泥舟も村山家も徧通とき夫婦のことで悩みが尽きない。

文書16 明治32年12月28日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 お幸・真とも健康に、いたずらしていますので、ご安心ください。台湾からは久しく手紙もなく、どうしているのか、まったくわかりませんが、まず無事と思えます。

ご国産のミカン2箱、今朝届き、有難う御座いました。早速開いて子供に遣わしましたところ大喜びでした。

なおなお、我妻も体を痛め、ここが痛いあそこが痛いと困っています。こんなことでいつもご無沙汰してしまい、よろしくとのことです。真は道太郎を特別に慕い、少しも離れません。お幸は我妻から離れず、朝より晩まで「婆々婆々」と言っています。

〔コメント〕 お幸・真の近況。村山家では静岡産のミカンをよく送っている。

文書17 明治33年3月30日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 智妙様、流行の風邪に罹られ大変思われたとのこと、あなた様、徧晴（春）殿もお悩みなられたこと、嚙々お困りと御察し申し上げます。最近のご快方とのことで大変喜んでいきます。私も以前我妻が手紙を差し上げました通り、昨年末から流行の風邪に罹患し、前々から心臓病で弱っていましたから、殊の外危篤になり、今回はもうだめかと思いましたが、1月半ばから不思議にも少しづつ、快方に向かいました。しかし疲労が強く未だに床に居ります次第。こんなことで筆も取れませんで、御無沙汰していましたが、最近暖かくなってきましたので、医師も進めますので楽しんでいきます。

体調もよくなり子供（お幸・真）兩人とも健康です。お幸は婆（泥舟妻）、真は道太郎夫婦で受け持ち育てています。しばらく 子供が居なかったところに子供を持つことになり、朝夕時間がない状態になりました。徧通からは久しく手紙もなく、何度手紙を出しても一度も返信がありません。道太郎達も頻りに心配して、台湾の知人などに探索を依頼したところ、今朝郵便が届き、その中身は道太郎から言わせますのでここでは述べません。徧通も台湾で流行したマラリヤ熱で長く病床にあり、ようやく最近起き出したところで、手紙も出せなかったとのこと。未だこの様子では近々の帰



京もできないだろうと困っています。いずれも御返事かたがたお見舞いまで。

文書18 明治33年6月11日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 そちらにも徧通から手紙が行ったようですが、先日私の方にも来た手紙によれば、急に帰京もできない様子です。二人の子供が人手の無いのところに来ましたので、頗る迷惑しておりますが、徧通もよもや安心しているわけではないと思います。遠隔の地で何をしているのか、判然としません。ときは、離別の手続きを取り計らい、籍も抜く手続きを進めていると承知しております。私が生きている間は、子供もどうにか致しますので、ご安心ください。

お申し越しの石碑の文認め、発送しました。二行法名の中、少々開き過ぎと思しますので、そのことを書いておきましたが、なおお伝え頂けましたら幸いです。

なおなお、家族からもよろしくとのことです。

〔コメント〕 徧通妻ときは村山家の戸籍を離れることになった。

文書19 明治34年1月10日付 村山智妙宛泥舟葉書

〔大意〕 新年のご挨拶いただきました。こちらからもごあいさつ申し上げます。寒気の差しさわりもなく何よりです。当方も私も子供達も元気ですのでご安心ください。

文書20 明治34年9月29日付 村山みき宛泥舟書状

〔大意〕 先日認め差し上げた揮毫、都合がよかったとのこと、付いては志賀・角岡両氏への揮毫、近日認めお送り致します。

お送りいただきました漬物、ただいま届きましたのですぐに味見させていただきました。智妙様によりしくご伝声ください。

私の病気はとても全快は難しいですが、少しずつ良くなっていますのでご安心ください。去る六月初め妻が発病し一時は危ない状態でもうだめかと思いましたが、幸い良い方に向かいました。しかし今もって寝たり起きたりの状態で、少し季節が変わると病気にさわり誠に困っています。この二、三日も急に冷え込みましたので体調が悪く、子供もいる事なので世話も行き届かず困っています。

私の病気はまあまあいいので、駿河から三河へ行こうと思っています。実は医者にも転地療法を勧められていますが、妻や亀吉が病気で出かけることが出来ません。ようやく時候もいので駿河から遠州あたりへ養生に行こうかと思っています。遠州の可睡斎という寺に三、四年前から行きたいと思っていました。今まで行けず、今回は是非参詣したいと思っています。いよいよ出かける段になりましたら、お知らせしたいと思います。

〔コメント〕 可睡斎は、袋井市にある曹洞宗の名刹。徳川家康、井伊家、村山家ゆかりの寺院。明治4年ごろ、鉄舟・泥舟が学校建設計画に協力したことがあった。

文書21 明治35年9月14日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 焼津あたりの海のしけを心配しましたが、特にさわりもなく安心いたしました。とかく最近荒れ模様で大変だと思えます。

浅野殿の老女倅から添書の件で願いがくるとのこと承知いたしました。

志賀・角岡両氏への揮毫、お喜びの由、付いては、志賀氏の実父が61歳の賀の祝儀で扇子100本を揮毫してほしいとのこと、承知しました。他ならぬお頼みですから、ご注文通りに揮毫いたします。私もそのうちには養生かたがた近国の門人の家に行こうと思えますので、長くなると思えます。当月中に扇子（100本）お送りくださいますようお願いいたします。

お幸も健康です。毎日毎日私の不自由を心配してくれてかわいく思っています。本当に病気の時は不自由で、亡き妻にも朝夕特別に心を尽くしてくれましたので、病気になると思ひ出します。真ぼうは、道太郎を真の父親と言って、朝から晩まで付きまとい、時々うるさいと思う程ですが、子煩悩の故、あまり可愛がるとわがままばかり云うことになりません。まあご安心ください。

私の病気も快方に向かっていますが、疲労しています。もっぱら滋養物をいただいて養生しています。この頃少し肉もついてきました。

〔コメント〕 泥舟家の家計の足しになるように村山みきが、志賀の実父の還暦祝いの引き出物に泥舟揮毫の扇子100本を仲介したことが理解される。明治期の泥舟家の生活はひとえに泥舟の揮毫の腕にかかっていた。それを親戚縁者が仲介して支えていたことが理解される貴重な書状。

〔大意〕 東京の暴風雨、ご心配いただきありがとうございます。随分荒れましたが、新聞でも報道の通り牛込辺りは軽い方でした。しかし早稲田辺りには潰れ家などもあり、我が家も塀垣などだいぶ吹き倒され迷惑しています。ともかく28日の夜明けから荒れはじめ、29日は強風、30日は晴天でしたが、風が強く吹きました。こちらも海辺ですからおそらく大荒れと思い心配しましたが、軽かったとのことで安心いたしました。近頃は風が度々起こり実に困ったことですね。

志賀氏の扇子ですが、すでに4、5日前に三州から送られてきました。近日揮毫して送りたいと思います。そのようにご承知おきください。

お幸も健康です。こちらもお祭りでした、19日は赤城神社のお祭りでにぎやかでした。午後からは大雷雨でお祭りもめっちゃめちゃになり、真ぼうなども大弱りになりました。

文書23 1月3日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 東京の私や山岡一同皆無事に越年いたしましたのでご安心ください。貫一も健康で、日々来客が多いので私の小間使いをしてきています。当地に来て初春は久しぶり、この住居は閑静で春も春らしくないので、今朝より山岡に行かせて春の景色を見せました。しかし今年は物価高でさみしいものがあります。私は年末から少し風邪気味で、家でお客あしらいだけで、忙しくしております。

昨冬、石坂が帰った時、お申し越しの額面を（石坂に）言付けましたが、届いていませんでしょうか。同人も忙しい人なので、届けるのを忘れてはいないかと思いました。もし届いていなければ、何かのついでに同人方へお問い合わせてくだ

をい。

〔コメント〕 泥舟の額面を石坂周造が届けた。石坂は泥舟妹お桂の夫で、相良で石油掘削会社を創業していた。石坂および村山で、泥舟の揮毫販売促進活動を親戚で支えていたことがよくわかる。

文書24 1月3日付 村山智妙宛泥舟書状

〔大意〕 旧年中も多事でご無沙汰致した事、御許し下さい。この度、妹が遠州に帰りましたが、次郎吉も同道し帰りました。同人に詳しく申し含めましたので聞いてやってください。相変わらず来客が多く少しも手すきになることがありますので、後便で申し上げます。おみき様、徧通へもよろしくご伝声ください。

〔コメント〕 妹は石坂周造妻の桂と思われる。

文書25 1月9日付 村山智妙宛泥舟書状

〔大意〕 次郎吉が伝えるところでは、おみき様、少し体調が良くないとの由、今は如何でしょうか、心配しています。早くに妻からお手紙を差し上げなければならぬところを、人がいないところに日々来客があつて取り込み、御無沙汰してしまいましたとお詫び申し上げます。

昨年は杉浦様が東京に来て、度々、御尋ねいただき、毎回お構いもできず申し訳なく存じております。お詫び申し上げます。よろしくお願いいたしますように存じておりますので、よろしく。

文書26 2月19日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 徧通も日増しに大男になって、働いていますのでご安心ください。このたびそちらから出京の幸便があり、一筆ご近況を伺い申し上げます。詳しく當地の様子を申し上げ度思いますが、とりわけ来客が多く、いずれ後便で申し上げます。

なお家族からもよろしくとのことです。

文書27 3月22日付 村山家宛泥舟書状

〔大意〕 相良石坂方に安着しました。序の時、大久保に伝えていたきたいと思います。

茶編の着物縫い直しくださるということでしたら、すそはぎは新たにお求めいただき付け替えていただけるようお願いいたします。なるたけ早く帰りますので、貫一にもそのようにお伝え頂きたい。

文書28 4月10日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 先日上伝馬町大火の由、さぞ大騒ぎのことと思います。当地（東京）は昨冬より出火がなく、かえって地方の大火を聞くことが多い気がします。私も昨冬からどこともなく気分が悪く弱っております。亀吉も不順な天候故少々思つて困っています。

徧通は、健康で働いておりますので安心してください。

「万年青のかわり物」ができ、評判の由、大面白いです。「かわり物」はこの次の葉をなすときには兎角元の葉に変わるものようです。そうでありますから変わった時に見切るのがよろしいかと思いますと、近所のおもと屋が言っていました。なるほどそういうこともあるかもしれないと思いながら、ちよつと申し上げました。大久保も不快で追つて危篤とのこと、甚だ苦心しています。御察してください。

〔コメント〕 万年青（おもと）はユリ科の常緑多年草。江戸時代から観賞用に栽培された。明治期に栽培が流行した。

文書29 4月13日付 村山智妙宛泥舟書状

〔大意〕 先便で滝川に封書を送ることをご依頼されましたが承知しました。この件は郡長によくよく言っておきましたので悪しき取り扱いはないものと思えます。かつ滝川に頼むのも好ましくないので、せつかくのご依頼なので封書を認め委細頼みました。そのように承知し三上氏へもお聞かせくださいますように。もつとも滝川へも杉山へよくよく頼み置いていることを申し遣わし置いたので、滝川より三上氏へ何かと申し出ることも予測できずにいるので、その心得で御出になられますよう通しておいてください。

当地の私どもや親戚一同は無事ですから安心してください。私もいたって丈夫で、毎日認め者をしていますので安心してください。毎日来客が多く忙しくしています。ご無沙汰をお許しくくださいますように。大久保老人も病気ですが、少しは良くなっているようです。しかしながら難病で、おそらく何かとご厄介になると思いますが、どうかお心添えお願ひいたします。

なおなお、おみき様にもよろしくお願いいたします。妻からもお手紙を差し上げつもりですが、御存じの通り朝から晩まで食事もできないほど忙しくしていますので、いつもご無沙汰してしまい、お詫びしたいと思います。毎日来客が多く、特に混雑して困っています。お笑いください。

〔コメント〕 泥舟は体調がいい時は、揮毫をして生活を支えている。泥舟に揮毫を頼む来客が多いように思われる。親戚大久保家の老人が難病なので、心添えを依頼している。

文書30 4月27日付 村山みき宛泥舟書状

〔大意〕 この度は御老人（智妙のことか）よくぞご出京なされ、久々に面会致しましたが、少しも御変わりなく、健康そうに見えましたこと、お喜び申し上げます。久々なのでお構いをしたところですが、ご承知の通りですので、お構いもできず、気の毒に思います。徧通は昨冬から当春まで一通の手紙もよこさず、実際、生死のほどわからず、今日は来るかと思いきや音信なく、徧通が世話になっている方に向けて道太郎が手紙を出しましたが、この頃返事がきました。それによると、手紙を送ったところにはおらず、よそに行ったままでありますが、手紙の内容は通じているようです。そんなわけで、近日中に徧通から手紙も来るかと思えます。実にあきれ果てたことです。

屏風一雙揮毫依頼の件、承知しました。不出来ながらお土産に差し上げます。他に額面・小物。半折など少々差し上げます。何かお土産物と思いましたが、そのお土産の代わりに、子供に夏物と思いましたが、上げていません。当方でも道太郎も勤めもなく遊んでおり、老人の腕一本で一同を養っていますので何事も思うに任せず、よくよくお察しください。この度も老人をお構いできないことあしからずご承知ください。私も病気はまずまずよろしい方ですが、そのう



ち歩行も出来なくなり、4年越して薬も飲んでいますが、全快しておらず、困ったものです。

御老人より伺うところでは、日々学校にお勤め御骨折りの由、よくよく御勉強ください。私の病気が良くなれば静岡よりそちらにかけてお伺いしたく、その時、ゆつくりと御目もじできたら、いろいろお話申し上げます。

文書31 5月10日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 徧通の病気を心配され、費用等手厚くお送りくださいましたが、父子の間柄ですので、行き届くだけ心配しますのは当然です。徧通のことに付ご配慮は御無用です。さて不快も少しづつ良くなってきましたが、当地はこの五、六日前からまたまた寒くなり、天候不順のため健康な者でも、皆患ってしまうほどです。徧通の体にも特別に障りがあり気分が良くないようで誠に苦心しています。医師も親切に治療してくれます。いろいろ薬も使い、看病人も大勢いて、不足はないのですが、そのへんはご心配はないのですけれど、よほど疲労が強く、万が一他の病気が出てしまうと何分にも難しいこととなり、医師も大変苦勞しているところです。寿命は天命であり、出生の時に決まっているものだから、どうにもならないことですが、治るものならば一日も早く治ってほしいと皆で話しています。妻や娘、そのほか謙三郎の厄介お柳など頻りに神仏に祈っています。看病と療治はまず届いているものと思えますのでご心配には及びません。私も昨年よりいろいろ心配のみで心中御察してください。当今は誠治も帰ってきて、いやはや寢床もない状態の混雑ぶりですが、誠治は病気はよくなりまして、徧通の薬を取りに行く位は人力車に乗っていきます。何事においても宿世の約束ですので、少しもめげておりません。心配しないでください。

文書32 5月15日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 徧通を深く心配していただき、長く育んでいただきました、でさぞかしと思います。

私としても追々そろばんや簿記の修行もできるようなになれば、是非とも勤めさせて、ご安心なさるようにならせたいと楽しみにしていました。すでに心当りに頼んでいたところでした。そんな時、ふと重病になり、一時はよかったです、この分だと早く回復すると思っていました、そのようにはならず、最近ではますます疲労し全快はおぼつかない状態になりました。天命とはいえ、まだ壮年ですので、たいへん残念に思います。誰にも言えないことですが、どうか私の心中をお察しください。医師も最初から難病であることを言っていましたし、特別に心配して力を尽くしてくれました。しかし寿命というものもありますから、全快しないと云うのでもなく、しきりに薬用させていたのです。おかゆも少しずつですが三度いただき、そのほか牛乳、スープは随分飲みました。お菓子もカステラやそのほか何でも少しずつですが、いただきました。

何事も既に決まっている、運命なので、人の力の及ばないことことなので、御老体（智妙）があまりご心配になり、体が弱っては宜しくなく、如才は有りませんが、此の事を申上げて置きます。

徧通に手紙を送られ、為替で金子を送られた由、同人も慶び、手紙を差し上げたかと思っておりますが、何分書く事も出来ないで、私から宜しく申上げる様、申しております。私たちで力及ぶ限り薬用やそのほかのことも、尽くしますので心配しないでください。私も老人になり、いろいろ心配事はかりですが、これも運命と思ひ、少しもめげないで居ます。いずれもお返事まで。為替届きましたこと申し上げます。

〔コメント〕 泥舟のところに徧通が病気で、村山家が為替を送ったことが理解される。

〔大意〕 偏通不快もすでに80日になりました。快方に向かわず疲労も強く、重病です。これまで療治してきた千葉(修造) 医師は、私と兄弟同様に交わってきたもので、通り一遍な治療ではなく、いろいろと力を尽くしてくれました。しかし、思うようにならず困っています。そんなわけで、今日は朝廷(政府)が雇っている、東京大学医学部教師ドイツ人ベルツという「大医」に頼み、診察をお願いしました。そうしたところ、千葉医師の治療は、的確で、自分の見立て・治療計画と少しも相違はない。もっと薬を強く用いればよいということでした。日本ではこのベルツと云う人よりも上手な医師はいませんから、この人の治療で全快しなければ、それはもう天命としか言いようがありません。

私も幸いに何とか生活して居ります故、第一の医師にも見てもらいましたから、たとえ天命が尽きても思い残すことは無いので、せめてその邊はありがたく受け入れて下さい。遠く隔たっていますからおさらご心配と幾重にもお察し申し上げます。そちらにいては、あなた様がどのように思ってもよき医師もいませんから、特に心配をかけることになりましょう。看病人も御承知の大人数ですので少しも困りません。よね(泥舟長女)も昼夜気を遣い注意して一心に世話をしています。そのあたりは少しも心配はありません。実は御兩人様の内、お出で願いたく思いますが、寝所もない大人数で、ことにお留守宅も心配で、猶更私の心も痛みますので、この上は御兩人様万事気を確かにもつて、寿命は医師の力の及ばないところですから、神仏に祈っていただくようお願いいたします。さてさて思いもよらないことばかりですが、心中お察しくださいますように。この四、五日は子供も病気で昼夜やかましく大騒ぎしています。

〔コメント〕 ベルツは明治9年来日したドイツ人医師。東京医学学校(のち東京大学医学部)教師、26年在任、宮内省御用掛を勤める。明治38年離日。ベルツを仲介したのは鉄舟か。

文書34 5月27日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 先日からご病気、時々吐血とのこと、心配していましたが、大いに快癒とのことめでたく存じます。しかしながら、ご高齢ですから健康を過信せず、よくよくご養生ください。さて、徧通の昨今の容態をお話申上げようと思った時にお手紙をいただきましたので、以下に書きます。

この四、五日前から雷が始まり、強くなり大雨も雹も降りました。温かい時からこうも寒くなるものかと実に不順です。健康な者でも皆皆病気になる程で、長く患っている者はなおさらです。さぞかし障りがあるかと心配に思っていたところ案の定、具合が悪い様子で、2日ほどは大変弱り、大変心配しました。一昨日からは突然気分もよくなったと言って、いただき物もとてもおいしくいただき、牛乳も1日2合は飲みつくし、そのうえに養生になるようなものをいただいています。この分では、おっしゃっていましたが、親と云うのは同じようによきにつけても心配なものでございます。なお一日二日、様子を見てご連絡申し上げますので、心配しないでください。ついては御病気などなければご出京もなさってとは思いますが、いまだおなかの具合がよろしくないとのこと、これが治ればご出京もと存じますが、決してご高齢・御病気をおしてご出京は御見合わせいただけましたらと思います。このように申し上げても、御親切に心配なされてのご出京をおとどめするわけではありません。ご健康でもご高齢ですから、万が一ご出京でお体に障りがあっても、なおさら貫一が心配します。今、お手紙の内容をお話ししましたところ、このうえお母上様にご出京され、若しご病気にでもなられては、たいへんなご苦勞になるので、そちらでよく養生するように申上げたいと頻りに心配していると徧通が言っております。決して私や徧通はご出京を妨げようとしているのではなく、実にお体やらご費用やらを心

配して、腹藏なく申し上げているのです。私も昨今は持病のかんきで気分が悪く、とかく塞いでおり、困っています。徧通が少しよい容体なので、少し気力も取り直しています。昨年からのいろいろな苦心、お察し下さい。何もとりあえず、御受けのまま。貫一（徧通）の容体、概略申上げました。

〔コメント〕徧通の病気に關して村山家に伝えた書状。智妙の出京をやんわりと断っている。

文書35 6月5日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕（前欠）決してお金を回していただくような心配はないようにしてください。しかし貫一は心丈夫の様子で、慶びの色が顔にあらわれています。この分では幾日か日が立てば壮年ですので、早く回復するのではないかと楽しみにしています。少しご安心ください。

なおなお、今朝濱野から貫一が病気とのことを聞いたとして初めて手紙が来ました。おそらく県令へ手続きを求めての下心と大笑しました。同人は、私が先年そちらでご厄介になった時、面会したままで、全く一通の手紙もよこさず、音信不通になっていましたのに、今さら病気見舞いくらいで機嫌を取りなおすなどできません。軽薄者の志は、不愆です。

文書36 6月11日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕私や山岡も無事暮らしていますので安心してください。貫一も手紙を書きたいようですが、山岡・中西に泊まりに行ったり、また道太郎初同行で「江戸見物」に忙しく、今日も手紙が書けず、延引しているので、おそらくお叱り

を受けるかもと言っております。今日も杉浦様がお出京で来ていただき、貫一も大喜びで直ちに御両人様（智妙・みき）はいかがお暮しかと尋ねていました。まずまずご安心くださいと何か或る仕振のような挨拶をしていましたのはなかなかおかしかったです。山岡も昨日無時帰京しまして、貫一も中西から山岡に泊まりに行き、鉄太郎に面会しました。山岡も謙三郎と見間違え大笑いしたとのことです。かねてうかがっていた宮内省のことも話しをしたところ、早速尽力すると言ってくれました。なおよくよく聞いておきますのでご安心ください。

妻からも手紙を差し上げるべきところ、「大たぬき」（妊娠中）のうえ来客が多く、誠に弱っています。ご無沙汰を存じながら申上げることよろしくお笑くださいと言っております。

おみき様に申し上げます。先日から持病の病気とのことではいかがでしょうか。貫一も心配しています。今日、杉浦様に来て何うところでは、先々特別のことはないとのことで、貫一も安心したようでした。十分のご養生をお祈り申し上げます。私が腹の中で考えていますのは、あなたのところへ行つて居るうちに、寛さんへ行きたい、伝馬町に行きたいと申して、あまりやきもちを焼かせてしまふよりは、持病病気のことを考えて、このち上つてもおやかせるようなこととは言わないので心配しないでください。東京に帰つても柳橋やら堀やらあちこちの別嬪どもが「なぜ早くお帰りにならないの」と恨み言をいうので実に困りました。あれまたこのようなことをつい筆に任せて書いてしまい、書きなおすのも時間がないのでそのまま出してしまいますが、これはうそと思つてください。残りはのちの手紙で申し上げます。お母上様のお世話よろしくお願いたします。

伊東さん、三上さん、寛さん、そのほかによろしくご伝言お願いします。忙しいので別に手紙は出しません。  
〔コメント〕 文書Ⅰの後かと思われ、とすれば明治13年の書状。内容的に重なる所が多い。

## 文書37 7月1日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕（前欠）良い方に向かっていますから心配しないでください。ただただ渴きを頻りに訴えますが、子供と違い、内々に食べるので困っています。あまり食べすぎると皆々が言えば、腹立って大笑いしています。この頃も一日二日は少し痛むところもあって、医師から小言を言われることもあります。徧通の容体を申上げましたが、私も先日より下血し、それが止まると水寫し、今は痔疾となつて悩まされています。しかし、格別なことではないので、安心してください。二人の子供はかわるがわる病気になる、五十雄はよほどよくなかったのですが、昨今は大いによくになりました。何の因果でしょうか。むかしより別嬪をはねつけた崇りとあきらめています。近頃は昨年の病よりひげをはやしました。そのひげがよろしいと騒がれますので、どうしたらいいか工夫の最中です。よいお考えがあればお教えください。くれぐれも徧通不快はもはや心配いりません。ご安心くださいますように。

## 文書38 7月22日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 杉浦様が出京され、そちらの様子を詳しく伺い安心しました。最近暑気が強くなりましたから、御兩人様とも御障りないでしょうか伺いたく存じます。当地私方初いづれも無事で、貫一もいたって健康で、時々山岡・中西に行き、東京見物もしております。私のところに来る者も一同、貫一をかわいがり、皆、家に来るように言うのですが、いまだ東京に慣れていないので、「いやだ」と言つて行かないのです。もっぱら山岡に行つて泊まります。時々私について両国あたりに行きます。同人のことは心配しないでください。御兩人様が心配しているだろうからお手紙を差し上げ

るように云うのですが、実に面倒がつて、ただ「はいはい」と云うだけでいつもご無沙汰しております。ご無沙汰している事は無事であるとお察しください。

次郎吉も今日、宮内省仕人仰せつけられ、ありがたいことでございます。そのうち貫一もそのようになるかと思えます。そのうち東京の様子も見させたうえでと特に急いではいせんが、先日山岡へ委細頼んでおきました。

三上さん、伊藤さん、寛さん、大楠さん、そのほかへよろしくお伝え下さい。そのうち遠州に行くこともあろうかと思えますが、その御は、またお世話をおかけいたします。伊藤さんへ将棋、よくよくお稽古してくださいと伝えください。妻からも手紙を出したいところですが、「大狸」で誠に苦しくついついご無沙汰してしまっていますので、よろしくお詫びしてくださいとのことです。近日、子と孫が一同に飛び出すのではないかと思ひ、甚だ老人の私は困っています。

〔コメント〕 本状も明治13年か。

文書39 7月25日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟妻書状（実際には泥舟筆）

〔大意〕 昨今は暑気強くなり、ご兩人様お障りもなくおめでたく存じます。当方も拙宅はじめ山岡にても一同健康でございます。ご安心ください。貫一も到って健康で、大人になり、今お会いになればあきれるくらいですと時々話します。

先日中西さんから金子が届きました、早速ゆかたを買いました。そのようにご承知ください。

先日はお隣の件お申し越しになりましたので、山岡の妹に聞かせました。なおたびたび申し聞くようにしますので、この段お含み置き下さい。この件は精一が申上げます。



伊藤さん、はじめご近所によりしくお伝えください。

先日、山岡の妹が出かけた折、ゆつくりとお会いすることが出来、同人も旅をしたためか、気分もよく大喜びでした。私も暑気に弱ること無く、結局筆に責められ困っています。以上申し上げます。

妻の代筆です。暑気見舞いの客多く、急ぎ認めました。ご判読ください。

〔コメント〕 妻の代筆を泥舟がしたもの。筆跡は泥舟で間違いない。明治14年か。

文書40 8月2日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 徧通も健康です。このごろは、人がいないので忙しく用達しをしてくれていますので安心してください。隣のおみつさん、おたかさんとも相変わらずおならをなさっているようで、お宅にお世話になっていた時、たびたびおならに迷惑し、東京に帰ってからも度々思い出し、このち行くことがあれば、御芋をたくさん食べて一つくらい私もおならをしたいと思います。今から稽古を心掛けたと思います。

徧通の寄留願い、そのうち三上さんにもお願い下され、当方に御回しただきたくこの段申し上げます。

謙三郎も私の先妻の姉末吉と云う家からは非養子にしたいというので、近日養子にやろうというつもりです。このこともついでに申し上げます。

三上・伊藤両氏をはじめよろしくお伝えください。

〔コメント〕 泥舟先妻は市川滯、姉は末吉鳥、謙三郎は泥舟三男、末吉家に養子となる。

文書41 8月15日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 私も山岡も変わりありません。貫ぼうも元気ですので安心してください。貫一は四、五日山岡に泊まりに行っています。山岡でもかわいがつてもらっています。山岡でもたびたび泊りに来るように言うものですから、貫一もにぎやかで面白いと見えて時々泊りに行きます。

先日、貫一の寄留証御回しいただき早速差し出しましたが、貫一の実印ないのはだめとなりましたので、今回はちょっと出京のところをそのまま寄留いたしましたことにつきまして、代印で済ませてもらいたいと申し入れました。今回限りになります。御ついでの時に印形を御回しください。ついては、杉浦様か伊藤さんか、留守お引き受けの方でどなたでもよいのですが、其方の名前宛に委任状を上げないと利子お受け取りに差し支えるとのこと、委任状を拵えていただき、そのうえ小さい箱に入れて送ってよこしてください。そう急ぎませんのでそのこと申し上げます。

私の羽織の布を織っていただいているとのこと、ありがとうございます。お送りいただくは自分に似合うと思います。粹で立派なものをお願いいたします。当地では私を菊五郎や左団次などいろいろ言っておりまして評判が良いのです。年寄になってこのような評判は実に心配ですが、おならをひっかけられるのはそちらにおいての新蔵方ばかりで、当地の別嬪はそんなおならをしないのです。いろいろ申し上げたいのですが、このごろ眼病に悩んでいますので概略申し上げます。いずれ治り次第詳しく申し上げます。家内一同からも宜しくとのこと、です。

（追伸） 寄留の受取証をお送りします。戸長役場に提出してください。

文書42 9月5日付 村山徧通宛泥舟書状

〔大意〕 義一の法名は次の通り認めました。

真観院清淨孩児

当地拙者初一同無事ですのでご安心ください。

御母上様はじめ皆さんによりしくお願ひします。取り込んでるので別に手紙を差し出しません。この件をしかるべく申上げてほしいと思います。こちらの様子は広瀬氏よりお聞きになってください。

文書43 9月12日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 御承知の通り、当地ではコレラが流行しています。昨今は寒くなり大いに少なくなりましたが、実に大騒ぎでした。私の近所でも二、三軒患者ができました。その上、最近門前の道が広くなりましたので、毎夜5馬車ほどづつ、死人を載せて通りますので、皆々気が引けてきます(1馬車1ダアスと言って、12人の死人を載せているとのことです)。しかしながら私および親戚は皆健康ですのでご安心ください。ただ妻が先月は暑気あたりのようで、引き続き脚気やら胃病やらで病臥しました。小児がいるのでこれには困りました。しかし昨今は少しづつ良くなっていますので安心してください。

先日ご依頼の硯ですが、高木という高名の鑑定家に見てもらいましたところ、この石は甲州より出たもので、格別上等と言うものではなく、商人見本の硯で、六、七匁くらいで、高値にはなりにくいもの由です。すでに高木は甲州の石をたくさん買い入れていますので、何分にも売れませんでした。何俵も積んでおいてあるそうです。それで取引は断ってきました。他の者も大体同じようなことを言っています。この様子では、当地にお運びになっても大方は損になると

考えます。以上、腹藏なく申し上げますので、親主の二人にお話してください。せっかくのご国産ですので朝廷に献上となればやはり県令にお願いしなくてはできないのではないかと思います。念のため申し上げます。詳しくは貫一より申し上げますが、私からもあらあら申し上げます。

文書44 10月8日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 今回お手紙をいただき、妻の件お尋ねいただきましてありがとうございます。一時はよほどの大病でしたが、この度やや全快の姿になりましたので安心してください。さて、長女よねですが、先年より難しいことがありまして、親戚中のことなので、ぜひ忍耐するように意見を加えましたが、この度はとてもそのままにしておくことはできませんでしたので、双方相談の上、離縁ということになりました。それで、最近引き取りました。ですので飯高氏に届を提出したく思いますので、この封筒を御手数数ながら、同氏に提出してくださいますようお願い申し上げます。子供のことで時々心配させられ、実に困ったものです。これも因縁と思えばやむを得ないことかと思えます。当地も昨今はコレラもだいたい減りました。しかし先日先妻の姉や他家に嫁いだ娘たちがコレラで三、四日の内に倒れ、大勢の子供が残ってしまい気の毒なことになりました。中西の孫も最近急病で倒れたことを聞き、問い合わせたところ、これもコレラに罹って死んだとのこと。老夫人、誠に困っております。

文書45 10月12日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 この程の大風雨はいかがでしたでしょうか。私の方は幸い3日の午後過ぎに小川町の屋敷は引き渡し済みでした。その夜の大風雨だったので都合がよかったです。しかしながら山吹町も塀垣などは残らず吹き倒れ、はなはだ困りました。家は丈夫にこしらえてありましたので少しも被害はなかったので安心しました。引越して間もなかったので今もって片つけもしていません。修復の指図やら客あしらいやらで忙しく、目が回るようです。そのせいか最近目が悪くなり困っています。

先日御手紙で貫一の印鑑の件お申し越しますが、いまだ届をしていませんが、委細承知しています。郡村額面の件も、前文の騒ぎにて、今もって筆を執ることが出来ず、いざれ近日認めてお送りいたしますのでよろしくお話してくださいませように。お秀（泥舟妻）よりも手紙を差し上げるところ、亀吉（泥舟5男）にかかりきりで、来客も多いので、終日まごまごしてごぶさたになっていますことお許しください。貫一も至って健康ですのご安心ください。

文書46 10月13日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 徧通も至って健康で、働いていますのでご心配なきように。このようにご無沙汰申上げたのは、実は小児が病気になる一時大変案じられる状態だったためです。ようやく最近全快しやや元のようになりましたので、このようなご無沙汰になりました。私も先日風邪で薬を飲みましたが、その薬にめまいを起こし、去る1日夜12時ころより胸が詰まり、およそ3時間ほど息ができず、ほとほと苦しみました。昨今は追々全快し、平日のようになりましたのでご安心ください。

先日の御手紙でお隣のごことが書かれていましたが、山岡の妹へ伝えてほしいとのこと承知しました。先日病氣見舞いで

行きました時、一通り申し聞かせました。なおたびたび申し聞かせたく思います。この度は石坂夫婦が出京し山岡にいますので、大取込です。小声では話も聞こえないほどです。

先日、そちらの長次郎が出京しましたのでいろいろ様子を聞きました。諸物価が特別に高値になり、お困りと察します。努めてご努力下さい。貫一も何とか成るものと思います。

先日、誠治は山岡の世話で日本橋区役所書記に雇われまして、毎日通っています。そのうち外向きかまたは書記本役に取り立ててくれるかもしれません。しかし遠方で困っています。それで宅は人がおらず、貫一ひとり働いてくれます。いろいろ覚えるには至極良いのではないのでしょうか。朝より「貫一、貫一」と呼んで働かせています。この節には当地の慣習に慣れて来ました。お笑い下さい。

(追伸) なおなお貫一も忙しいので、格別ご無沙汰しています。そのようにご承知ください。来客が相変わらずあり、揮毫も多く、墨のすり手もなく弟子を雇っています。お笑いください。

大久保老人を何卒御心添えください。私もそのうち老人にも面会したいと思います。ぜひそちらに行きたいと思っています。

文書47 10月26日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 私・山岡ともに変わりありませんのでご心配なく。徧通はいつも元気になっています。先日書きましたように、一人で留守番をして働いており、修行するにはよろしく、安心してください。

この度、小野田長次郎、出京につき、そちらの様子委細伺いましたが、最近は東京より物価高はさぞお困りのことと思

います。どうか東京にお出ましくございますようと時々話しています。

この「半かけ」（半襟）は最近流行のもので、私の知り合いもかけていますので、送りました。おかけになり、油染みになったらば新聞紙につつんで火鉢の下に入れて、重しをかければ油もぬけます。そうすれば幾度もかけられます。知り合いはめかけさせて、かけはずしにしています。

隣家ならびに伊藤さんそのほかに、ついでの時に伝えください。私は、今年はおかけられませんが、来春はぜひお伺いしたいと。

こちらの様子は、長次郎に聞いてください。物価高で下々は実に難儀しています。しかしながら芝居などはいずこも大入りのようです。皆、お金はなくても遊びは上手と思います。妻からも手紙を出したいのですが、亀吉に手がかかりご無沙汰のみ申上げてしまいます。お許しください。

文書48 11月13日付 村山智妙宛泥舟書状

〔大意〕 さて私も御承知の通り多病ですので隠居したいと思えます。この度戸長へ届を出しました。ご承知おきください。この隠居願いは、50歳未満なので、道太郎が徴兵に該当することもあろうかと思ひ、徴兵を回避するためです。内々御含みください。徧通にもしかるべくお聞かせください。

先日は久々の約束で常陸に行き、筑波山に登り、また先日は武州八王子から高尾山に登りました。年寄仲間に入って、家にばかりいると子供のことなど思い出し気分が宜しくないので、所々出歩きました。そのうちそちらにも行きたいと心掛けています。ともかく隠居のこと申し上げました。

〔コメント〕 泥舟の隠居届の件、常陸筑波山登山の件、武蔵高尾山登山の件。

文書49 11月16日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 貫一も健康ですので安心してください。私も先月初めより下総九十九里浜から銚子に遊びました。所々で引き留められ、存外に日にちがかかってしまいました。ようやく最近帰りました。ついでには先般ご依頼の学校の額面も延引致し恐れ入る次第です。幸い石坂が出京しますので、同人が帰る時に認めて持たせます。そのようにご承知ください。下総銚子に行き、おみき様の母様を御尋ねしようと思いましたが、名前を知りませんでしたので、最初はわかりませんでした。段々尋ねたところ、帰京直前にわかりました。是非お尋ねしたいと思つたのですが、あわただしく出発しましたので、蒸気船にようやく間に合ったような状態でしたので、ついに何えず帰ってきました。特に変わったことはありませんが、申上げておきます。

貫一の衣類や羽織をお送りくださり、卯月に出来上がるのを楽しみにしています。

〔コメント〕 みきの実母は銚子に住んでいることがわかる。みきは、村山栄蔵・智妙夫婦の養女と思われ、徧通の義姉にあたる。

文書50 12月3日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 (前欠) 病気がよくなるように工夫してください。そのうちには次郎吉も全快すると思えます。そうなれば同人



か私の方で出かけて何とか取り計らいたいと思います。当地でも面倒な事がいろいろあり、私の一存では出来かねますので、この段どうかお察し下さい。いづれも取敢えずご返事まで

文書51 12月10日付 村山智妙・みき兩人宛泥舟書状

〔大意〕 鉄藏様のごことで、源昌寺にお頼みくださいました処、ほかならぬあなた様のお頼み故、引き受けてくださったとのことでありがたく存じます。しかしながら種々お手数をおかけし誠に恐れ入ります。ついては、私の疝気も軽いので、昨日は杉村に参り、鉄藏の件の見込みをお聞かせいただいたことを話しまして、同家も特別な考えはありませんので、今日、山岡・石坂にも話をしました。一同が言うことには、当人が望むことであれば、ともかくもその望みに任せるのがよろしいと同意を得ることが出来ました。なおまたお手数ですが敬一方へ次郎吉より委細申すつもりですから、同人と打ち合わせて、源昌寺へよくよくお頼み、願わずみにならなくても、早々望み通りに取り計らっていただきたくお願いいたします。昨日、当地にいた和尚に面会致しましたが、その時、得度願いは難しいと承りましたが、もはや徴兵の年齢ではなく、特に難しいこともないと思います。郡長が聞き届ければ済むということも聞いていますので、願いのところを敬一に申し聞かせていただき、戸長へ問い合わせて、当方へ言ってよこすように申し入れてください。私からも敬一になお言っておきます。長々親切にお世話いただきお礼のことばも御座いませんと次郎吉や妻がたびたび言っています。

〔コメント〕 鉄藏が源昌寺で得度する件で、村山家が尽力している。鉄藏は、泥舟妻秀の兄大久保鉄藏で、次郎吉のす

ぐ下の弟。敬一は鉄蔵のすぐ下の弟。源昌寺は、田中藩士の墓が多数あり、村山家の墓所もある。

文書52 年月日未詳 泥舟書状

〔大意〕 昨年は遠方に行き、年末に帰りました。特別取り込みましてご無沙汰して申し訳なく、お許しください。徧通からも手紙があると思いますが、出羽国は、寒い国で昨年11月より雪が降って誠に難儀（後欠）

〔コメント〕 徧通が出羽にいるのか、いるとすれば、よねの嫁ぎ先（山形県河北町長谷寺）か。

文書53 泥舟作「ちよぼくれ」

〔コメント〕 泥舟が貫一のための作った「ちよぼくれ」と思われる。幕末にはやった、はやし歌をパロディーにしたもの。とても調子がよいもので子供にも歌えそうなもの。

文書54 封筒

〔コメント〕 封筒のみであるが「泥舟」の署名があり貴重。

文書55 泥舟書状釈文（原史料は存在しない）

〔大意〕 先日お幸（徧通長女）を帰してから何やらさびしく思います。実は、妻がいないので二人の子供を預かっても行き届かず、台所の事や来客もあつて、何事も一人でするので、忙しく、（お幸を）あなた様に帰すことは、そちらも困ると思います。実にはやむを得ない次第です。真ぼう（徧通長男）はひとりになつても姉を尋ねることなく、おとなしくしていますので心配しないでください。台湾ではどのように思っているか、あなた方にはご苦労をかけ、私にも迷惑をかけ、実に申し訳ないことです。因縁ですからやむを得ないとも思います。先日から御手紙を差し上げたいと思つていましたが、気分が勝れず、来客もあり、認め物もあつて気にはかけておりましたが、文が延引したことお許し下さい。

〔コメント〕 徧通の2人子供のうち長女お幸は、村山家で養育された時期があつた。原史料はないが、釈文も大事な史料であるので掲載した。

#### 文書56 泥舟書状釈文（原史料は存在しない）

〔大意〕 今朝、新聞を一覧したところ、焼津港津波と記載されていきました。お住まいの辺りはとくに大丈夫かと思いますが、暴風雨は迷惑をされたと思います。当地も三、四日風雨が打ち続きましたが大荒れというほどではありませんでした。しかし本所あたりは出水で大難儀の様子です。兎角、世の中はいろいろなことが生じ困ります。ついでの時に近況をお聞かせ下さい。

私の持病もまずまず快方に向かっていますが、天候不順で気分が悪く困ります。先日は五十雄が大病して心配しましたが、漸くこの程快方に向かい安心しました。亀吉は母に分かれて以来、私のそばを離れず、一人で私の世話をしてくれ

ます。体も幸に丈夫です。しかし男子ですので何事も荒々しく、気が利きません。さてさて不自由です。お察しく下さい。

お幸も元気でしょうか。何かと世話が焼けるのではないのでしょうか。真ぼうも元気です。預けている道太郎夫婦はともかわいがっています。それで「あまえたれ」わがままを言うこともあるので時々私から叱るように言われるほどです。そちらの様子を窺いたく、とりあえず筆を執りました。

〔コメント〕 秀は明治34年12月に逝去。その後の書状。

文書57 大正6年10月5日 村山徧晴宛高橋道太郎書状

〔大意〕 先日、お幸より懐妊の知らせがありました。我々夫婦とも大喜びしました。普段もう一人男子誕生をお祈りしましたので、必ず男子だと話暮らしています。望月方でも去月男子出生、大自慢しています。さてご依頼の揮毫、もはや所々にあげてしまい、家に残ったものは屑ばかりで、屑の中から選り出して、ようやく二、三枚をお送りいたします。また山岡の短冊は、私は一枚も持っていませんので、山岡家に話しましたが、一枚もないとのこと、御断りを申し上げます。やつのことで「蝸牛の画賛」一枚見つけ出しましたが、これは鉄舟が拙宅に来た時に描いたもので、印もなく、不出来のものが差し上げます。このほかには鉄舟の書は一枚ありません。そのうちまたまた手に入れましたらお送り申し上げます。

〔追伸〕 先日は大桶に大好物の「チュー」お送りいただきありがとうございます。毎朝二、三本ずついただいています。「チュー」のため食も進み腹具合もよいです。実に何よりの良薬です。

〔コメント〕「蝸牛の画賛」は文書61として現存。本書とともにあるのが貴重。

文書58 12月20日付 村山徧晴宛高橋道太郎・同真書状

〔大意〕 先般婚儀の節は、御祝い物を頂戴し有難く篤く御礼申し上げます。今般、内祝いのしるしまでに粗品を郵送いたします。ご笑納ください。

〔コメント〕 真が結婚し、村山家がお祝いを送ったことへの御礼状。

文書59 明治15年10月9日付 高橋泥舟宛山岡鉄舟書状

〔大意〕 勇精院殿二三回忌にあたり御志をいただきありがとうございます。家内一同で回向、拝味致しました。

文書60 12月23日付 泥舟宛山岡鉄舟書状

〔大意〕 昨夜はゆっくりお話し出来てありがたく存じました。御手紙の趣旨、委細承りました。御約束のもの呈上いたします。ご不足の分は遠慮なくおっしゃってください。すぐへの御祝いありがたいいただきました。お体を大切になさってください。

文書61 (かたつむりの絵)

〔コメント〕 文書57で道太郎が村山家に送ったものと思われる。

文書62 明治14年6月25日 村山家宛山岡ふさ書状

〔大意〕 先日はお会いでき、娘にいろいろ結構な品をいただきありがたく、道中楽しみにして時々取り出しては眺めていました。滞りなく19日午後2時に伊豆の今井方へ着きました。

ご安心ください。先日お話ししました高須氏と静岡で逢いました。細かいことまで鉄太郎に伝えるとのことです。そのうち何とかなるでしょうとのことです。先方によりしくお願いいたします。来る30日に当地を出発し、東京に帰るつもりです。梅雨のころお体に気を付けて。

文書63 年月日未詳 村山智妙・みき兩人宛村山徧通書状

〔大意〕 高橋・山岡一同私も元気ですのでご安心ください。山岡・中西にも度々泊りに行っています。先日御手紙を拝見したところ御兩人様仲良くお暮しの由、お慶び申し上げます。なお、さらに仲良くお暮らしてくださいように、これのみ心配しています。

文書64 陸軍六週間現役兵合格証書

〔コメント〕 明治39年4月16日、村山みき養子徧晴が、陸軍六週間現役兵に合格したことを証する文書。静岡連隊区司令官中野廣が発給したもの。

(以降次号)